人生、何が起こるか分からない

martini

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
人生、何が起こるか分からない

【Ｎコード】
Ｎ０５３２Ｆ

【作者名】
ｍａｒｔｉｎｉ

【あらすじ】
これは、ある日のこと。ジンが女の子になっちゃうお話です。ジンが女のことになるのはいや！男の子じゃなきゃいや！という方は、読むのはやめたほうがよいでしょう。本当に、人生、何が起こるかわかりません。さぁ、ジンの人生、これからどうなる？！

ＦＩＬＥ　波乱の幕開け

それは、ある日のことだった。

「な、何だ、これ～？！」

朝っぱらから一人の男の声が響く。

「どうしたのよ、ジン？」

女が、ジンと言われた男の部屋に入った。

ジンは、泣きそうな顔で女の方を向く。

その顔を見て、女は固まってしまった。

「あ、あなたもしかして・・・・いえ、もしかしなくても・・・ジン？」

ジンは、こくりとうなずく。

ジンの叫び声を聞き、次々と人がジンの部屋にはいていく。

「どうしたんだい?!・・・へっ?」

「???」

「あ、あの・・・」

入ってきた人は、皆、口をあんぐり開けて固まっている。

「べ、ベルモット?!これ、どう言うことだい?!」

「知らないわよ!今さっき、ジンの叫び声を聞いて入ったらこの状態。ジンに聞いて。」

ベルモットは、冷静に話す。

「どう言うことなんですかい、兄貴?!」

「俺だって知るかよ〜!!」

「ウォッカ。ジンも分からないはずよ。分かってたら、ジンがあんなに大きな声、出すわけないじゃないの。」

「へ、へい・・・」

「とりあえずさぁ～。朝気がついたら、こうなってたってわけ？」

「それも、背が縮んだりしていたならまだしも・・・」

『‘女’になるとはねぇ（なぁ）・・・』

そう。ジンは完全に‘女’になってしまっていたのだ。

髪の毛の色は、銀髪から黒髪へ。

長さは、今までと同じ。

服装は、変わってはいないものの、体が女サイズにまで小さくなってしまったため、ジンの時、来ていた服はブカブカ。

顔も、すごく引き締まり、目は二重。色は青色。男の事は思えない顔だ。

バストは・・・服のせいで分からない。

「とりあえず、名前を考えましょ。ＦＢＩにばれたら、笑いものだもの。赤井秀一はたぶん、いつも笑ってない分、笑うでしょうね、おなかを抱えて。」

「・・・お願いだからそれ以上言わないで・・・」

さすがのジンも、その言葉には堪えたらしい。

「女ことばになってるわけ？」

ジンは、黙ってうなずく。

「とりあえず、名前よ、名前。何がいいかしら・・・」

ベルモットの言葉に、皆は考え始める。

「そうだわ。空川美羽(そらかわ みう)ってどうかしら。」

「それでもいい。」

「じゃあ、美羽ね！とりあえず、服を買いに行きましょう。はい、行くわよ。」

「えっ、ちょっと・・・組織の女の服でいいじゃない！」

「ダメだね。組織だったら、狙われるし。」

「狙われていいの～！」

『ダメ。』

美羽、完全に迫力負け。

「じゃあ、行くわよ。」

「は～い・・・」

服のことで、あれやこれやと騒いでいる、ベルモットたちの後ろからついていく美羽。

「ああ、あたしの人生、どうなるの・・・」

美羽は静かにそう吐いた。

そして、そんな美羽に降りかかる災難。

さぁ・・・波乱な日々の幕開けよ！

ＦＩＬＥ　波乱の幕開け（後書き）

ジン「なんでよりによって俺が女に・・・？」

ベルモット「まぁ、いいじゃない。作者の勝手でしょ？」

キャンティ「そうそう♪」

美羽「・・・何でそんなに明るいの・・・？」

ベルモット「これからが楽しみだからよっ♪」

美羽「しょうがないわね。男に戻る方法を考えなくちゃ。」

キャンティ「あれ？あの男の人って・・・」

美羽「次回の‘人生、何が起こるか分からない’は、『ＦＩＬＥ２　服屋さんで、組織の皆さん大暴れ！』です！ああ、あたしも頑張らなくちゃ。でも・・・こんな人たち、まとめられるかしら・・・？」

ＦＩＬＥ２　服屋さんで、組織の皆さん大暴れ！（前書き）

メッセージなどをくださると、嬉しいでーす。

ＦＩＬＥ２　服屋さんで、組織の皆さん大暴れ！

「さぁ、ついたわよ。選びましょ！」

「気が進まないわ・・・」

「何言ってるの！じゃあ行くわよ。」

「ひえ～！」

美羽は、叫びつつも目の前にある店へと入る。

「いらっしゃいませ～」

店員の元気な声が、店中に響き渡る。

「あっ、これかわいいわね。あっ、これも。」

あれやこれやと、ベルモットとキャンティはしゃべっている。

この風景を例えるなら、どこかのおばさんの立ち話にしか聞こえない。

「あっ！ああ～～～～！！！」

店内に、大声が響きわたる。

「あっ！ジョディ・スタ・・・ムグッ！」

ベルモットは、ジョディに口を押さえられた。

「お願いだから、スターリングまでは言わないで！」

「・・・グッ！よし、取れたわ。フフッ。いい機会だもの。皆にばらしてやるわ！」

「何ですって？！じゃあ私も警察にばらしてやるわ！」

「お、お客様！暴れないでいただきたいものなのですが・・・」

『部外者は黙ってて！』

「は、はい・・・」

店員、あっけなく黙る。

「その前に・・・格闘で決めない？そのほうが面白そうだわ。」

「そうねぇ・・・そうしましょ！」

「ストーップ！」

さすがに暴れられてはたまらないと、美羽が声を上げる。

「あたしの服は？！それに、あなたの連れは？！」

「ああ、あたしの連れ？」

ジョディはそう言うと、後ろを指差す。

何かと思い、ジョディの後ろを見ると・・・

すごいことになっていた・・・

赤井とジェイムズは、確かにいる。しかし・・・

赤井の手には、買い物袋、買い物袋、買い物袋の山。

ジェイムズの手には、かばんやら、財布やらの、貴重品。

楽なのは、やはりジェイムズだろう。（重いんだぞ、これ！ジェイムズ、代われ～！ｂｙ赤井）（そんなもの、年寄りに持たせるのか！？ｂｙジェイムズ）

「す、すごいわ・・・で、あの人たちの名前は？」

「ああ、あの人たちね。ただの荷物持ちで来てもらったんだけど、あの重たそうに顔をしかめているのが、（だから、『重たそう。』じゃなくて、重いんだって！ｂｙ赤井）赤井秀一。で、あたしのかばんを持ってくれてるのが、（『持ってくれてる。』じゃなくて、半ば強制的じゃなかったか？！ｂｙジェイムズ）ジェイムズ・ブラック。あっ、名前は誰にも言わないでね。」

「分かりました。」

美羽は、やさしい笑みを浮かべる。

「服は、キャンティが選んでくれるわ。さぁ、始めるわよ～！」

「ああ～！あたし、もうしーらない！」

美羽は、あっさりとあきらめ、キャンティとともに、服を選び始めた。

そしてその後、ジョディＶＳベルモットの戦いが、幕を開けた。

「くっ。引き分けね・・・・」

「ええ、そうみたい・・・・」

二人の戦いが終わった後の店内は、すごかった。

服は荒れ放題。レジもぐちゃぐちゃ。

更衣室は、カーテンが引きちぎられ、中が丸見え。

ところどころ、服は人にかかったり。

マネキンは、ところどころ破損している。

「お、お会計、１万７９５０円になりまーす・・・」

店員の声が、また響き渡る。

それほどの戦いをしていながら、負傷者はゼロ。

さすがだ。

赤井たちは、よっこらせと、腰をおろして、いろんな所をストレッ

チ。

明日、彼らはきっと、筋肉痛になるだろう。

「じゃあね。また今度、この店でやりましょう。」

「そうね。」

「も、もう店を壊さないで下さ～～～い！！」

店員の普通の叫び、ご尤(もっと)もだ。

「あたしたち、先に帰るわね～。秀一さん、ジェイムズさん。筋肉痛にはくれぐれもご注意を。それでは、つけはこの二人ということで。さようなら～。さぁ帰るわよ、皆。」

『は～い。』

美羽と組織の皆（ベルモットを除く）は、車に乗り込み、どこかに行ってしまった。

そして次の日。

面白い情報が入ってきた。

案の定、それは荷物持ちの二人の情報で・・・

ジェイムズはあのあと、そのうえにいろいろの物を持たされ、赤井同様になった。

赤井秀一と、ジェイムズ・ブラックは、動けないとジョディに伝えた後、医師の診断を受けたところ、重度の筋肉痛と下された。

絶対安静、と言われた二人。

彼らは1週間、動くことができなかったという・・・（笑）

ＦＩＬＥ２　服屋さんで、組織の皆さん大暴れ！（後書き）

美羽「散々な目にあったわね。服が飛んできたり、マネキンのかつらが飛んできたり・・・」

キャンティ「周りの人たちのこと、考えてるのかい？あんたたち。」

ベルモット・ジョディ「すみません・・・反省してます・・・」

赤井「ジョディ。お前がさんざんこき使ってくれたおかげで俺達二人は筋肉痛で、１週間動けなかったぞ。（怒）」

ジェイムズ「ジョディ君。ボスに向かってのその行動は・・・」

ジョディ「ああ～！すみません！２度としませんからぁ～！」

美羽「あ～あ。自業自得だわ。ウフフッ。」

ベルモット・ジョディ「お願い、助けて美羽（さん）～！！」

美羽「あたし、しーらない。」

ウォッカ「兄・・・じゃなくて姉貴！次はあのコソ泥が登場するそうですぜ！」

美羽「こ、こそ泥？」

？「フフフッ、私を知らない方はいないでしょうね・・・フフフッ・・・」

美羽「この不敵な笑い声は・・・おおっと。これ以上は次のお楽しみね。」

ベルモット・ジョディ「助けて～！！」

美羽「（・・・巻き込まれたくないわ・・・）さて、次回の‘人生、何が起こるか分からない’は、『ＦＩＬＥ３　初めてのご対面！その相手は・・・怪盗キッド！』です！ああ、また波乱の予感が・・・あたし、ちゃんと生きてるかしら・・・？

ＦＩＬＥ３　初めてのご対面！その相手は・・・怪盗キッド！

「ああ、暇・・・」

美羽は、自分の部屋のベッドの上で、ゴロゴロしていた。

何せ、やることがないのだ。

ジンの時だったら、作戦や、その作戦の配置などを考えたりするため、休める日なんてほとんどなかったのに。

今は、その逆。

暇すぎだった。

「ねえ、ベルモット～。なんかやることないの～？」

と、猫なで声でベルモットに言う美羽だが。

「ないわね。あたしも暇だもの。」

と返された。

「ああ～・・・なんであたしなんだろ・・・もともと一般人じゃなかったけど、男のままでいれれたらよかった・・・ああ、あたしはいったいどうなるの・・・」

美羽はただ、う～んと自分の未来を考えるほか、なかった。

美羽が考え込んでいるその時。

バタンッ！

急に美羽の部屋の扉が開いた。

「キャッ！だ、誰？！」

「あたしよ。」

「な、何だ、ベルモットか・・・」

ドアを開けたのは、ベルモットだった。

「高校に行くわよ。」

「はっ・・・？」

「聞こえなかったかしら？高校に行くわよって言ったのよ。」

「・・・どこからその話が？」

美羽は、唐突に言われたため、全然わからない。

「あなたが、暇だ暇だって言うから、高校に連れて行こうと思ったのよ。それに、友達だってほしいでしょう？」

「・・・友達なんて、いらな・・・」

「いいでしょ？」

「・・・もうっ。分かったわ、行くわよ。」

「よかった。手続きしちゃったのよ。」

「やっぱりね。」

美羽は、ベルモットが先に手続きをしてしまっているということが、分かっていたようだ。

さすが、長年付き合ってきた仲間だ。

「場所は、帝丹高校よ。」

「ああ、あの場所ね。分かったわ。」

「明日からだから、用意してね。じゃあ。」

ベルモットはそう言うと、さっさと部屋から出ていってしまった。

「明日から、つかれそうね・・・」

美羽は、用意をし終えて、部屋に入り、テレビをつけた。

そこには、こんなニュースが流れていた。

『今日、怪盗キッドからの予告状が届きました。その予告状は、こうです。‘Ｂ９Ｅ、ＶＺ＊ＫＴ０ＬＤＳＧ、２ＯＺＨＱＥ７ＭＹＳ６ＥＱＱＧＩＸＹＤ９＄Ｒ。怪盗キッド’記号と、アルファベットが混ざっており、警察も、非常に困難だと言っております。分かった方は、至急、警視庁へ連絡を！』

「ふう～ん。怪盗キッド、がねえ・・・それにこれ、パソコンのキーボードを見て、数字とアルファベットを見比べたら、分かるじゃないの。馬鹿じゃないの、今の警察は。」

暗号の解き方はこうだ。

パソコンのキーボードをよく見よう。

アルファベットや、数字の隣に、ひらがなが書いてあるだろう？

あとは解き方は簡単だ。

たとえば、予告状の最初。‘Ｂ９Ｅ’は、今宵。

これで分かっただろう。

数字やアルファベットは、隣に書いてあるひらがなを読めば、答えになるのだ。

つまり、答えはこうなる。

『今宵、ひつけが変わりしとき、フラックタイヤモントをいたたきにさんしょうする。』

このままでは、少しおかしいので、濁点をつける。すると・・・

『今宵、日付が変わりしとき、ブラックダイヤモンドをいただきに参上する。』

となる。

美羽は、読んだ瞬間、分かったらしい。

いつも、組織のことでパソコンを、長時間みている美羽、ジンは、並び方や、隣に書いてある数字ぐらい、覚えている。

だから、すぐに思い出せたのだ。

「ブラックダイヤモンド・・・見てみたいわね。キッドから死守すれば、結構ネタが手に入るかも。よしっ！ベルモットに相談よ！」

美羽は、勢いよくドアを開けると、ベルモットの部屋へと向かった・・・

夜になった。

ベルモットからの許しも得た美羽は、警察の皆には、『暗号が解けた。』と言って、現場に入ることが許された。

「（あの怪盗は、おもにハンググライダーで逃げ去るのね。じゃあ、屋上で待てばいいわ。でも・・・ここにいても、面白そうね。）」

美羽が考えていると、くいっと服の裾を持たれた。

「だ、誰？何だ、子供じゃない。」

小さな男の子が、引っ張っていた。

外見で、6、7才といったところだろう。

「どうしたの？ボウヤ。」

「ねえ・・・お姉さんでしょ？キッドの暗号解いたの。」

「えっ？ええ、そうよ？それがどうしたの？」

「あっ、僕、名前言うの忘れてた。僕、江戸川コナン。」

そう。その小さな男の子とは、コナンのことだったのである。

「あたしは、空川美羽。どう呼んでもいいわ。」

「じゃあ、美羽お姉ちゃん。あのね、どうして分かったの？僕、全然わからなくて・・・」

「キッドキラーでも解けない難問ってわけね・・・いいわ、教えてあげる。」

「ほんと?!ありがとう!」

コナンは笑顔で言う。

「(俺、本気(マジ)で、分かんねえんだよな・・・それがこの素人に解けたとなると・・・何か重大なことを忘れてるのかも・・・)」

「コナン君?どうしたの?」

「あっ、ううん。なんでもないよ。で、教えて?」

「ええ。今、紙に書いたんだけど・・・」

と言って、美羽がコナンに渡したのは、パソコンのキーボードの形、そして文字を書いてものだった。

「すっごーい!美羽お姉ちゃん、良く覚えてるね!」

「いつもパソコン見てるから、無意識に覚えちゃったのよ。で、この書いてあるアルファベットや、数字を探して?」

「えっと・・・最初のは、‘B9E’ええっと・・・あっ！今宵！今宵って読める！」

「でしょ？続けて読んで。」

「ええっと・・・分かった！全部読めたよ！ありがとう、美羽お姉ちゃん！」

「がんばってね、キッドキラーさん！」

「うん！」

コナンが元気よく答えた瞬間だった。

急にあたりが真っ暗になった。

停電だ。

「キッドが現れたはずだ！警備を厳重に・・・うわっ！暴れるな！！」

中森の声が響き渡る。しかし、騒いで怪盗が捕まるなら、苦労はしない。

「静かにして！たとえ怪盗でも、お化けじゃない。足音くらい、なるはずだわ！」

シ～ン。

美羽の声で、美奈は静かになった。

カッカッカッカ・・・・

足音が響き渡る。

「後ろだ！逃がすなぁ～！！」

中森が指示を出した。

しかし、相手も勝るものだ。

簡単に逃げられてしまったようだ。

パッと電気が戻ったころには、服だけが残されていた。

「ふう～ん。やるものねえ・・・」

美羽はそれだけ言うと、皆を置いて屋上へと向かった。

美羽は、屋上のドアをそっと開け、屋上に入り、キッドの様子をうかがった。

「これも違うな・・・」

キッドの声が、屋上に響く。

そして美羽は、不敵に笑うと、こう言った。

「見〜つけた・・・」

「？！」

キッドが、驚きの顔を美羽に向ける。

しかし、すぐにいつもの顔に戻した。

「これはこれはお嬢さん。初めてお会いになりますが・・・警察関係者ですか？」

「いいえ、違うわ。ねえ、キッド。今日の暗号は、手抜き？」

「いいえ、違います。少しひねりましたよ。」

「あの、言っていいのかしらね。見た瞬間、解けちゃったわよ、暗号。」

「！！」

キッドの表情が、少し変わった。

「それに、キッドキラーの、江戸川コナン君も、あたしが言うまで、分からなかったらしいわ。いつもと違う暗号だからでしょうね。」

「・・・あなた、これから私の好敵手になりそうですね。」

「あら、好敵手はキッドキラーだけでいいんじゃないかしら？あたし、ただきまぐれで来ただけだしね。せいぜい、目当てのものが見つかるように、全力を尽くしなさいよね。じゃあ。」

「ええ、いつかまた・・・」

キッドは、ポンッという音を残し、消えていった。

「ウフフッ。初めて会って、好敵手になりそう、か。きっとコナン君も、そう言われてたんだろうなぁ。すごいわ、小学生にして、キッドキラーだなんて。たぶん、目当ての宝石じゃなかったから、キッドキラーに、パシリにでも、なってもらうはずね。コナン君には、屋上に来いって言っておいたし。さて、あたしも帰りましょう。」

美羽は、屋上を後にした。

少し、笑みを浮かべながら・・・

明日、新聞には、コナンが一面、でかでかと乗っていた。

コナンは、新聞記者の質問に、こう答えたという。

『空川美羽ってお姉ちゃんが、‘屋上に行けば、キッドが宝石を渡すはずよ。早く行きなさい。’って言ったの。で、行ったらキッドがいて、宝石を渡したの。本当の手柄は、美羽お姉ちゃんだよ。』

新聞記者は、ほ～っと言って、メモに夢中だったという。

コナンの顔には、満面の笑みが浮かんでいたという・・・

ＦＩＬＥ３　初めてのご対面！その相手は・・・怪盗キッド！（後書き）

美羽「ふう。一件落着！キッドに会って、新聞に名前まで載るなんて、思ってもなかったわ。でも、少し嬉しかったりするのよねぇ～。ああ～、やっぱり、波乱の日々が来ると思ったのは、単なる勘違いだったのね・・・」

ベルモット「何言ってるの！次はあなたのピンチでしょう！」

美羽「あっ！忘れてた！どうしよっ・・・」

キッド「大丈夫ですよ。私が必ず助けて見せま・・・」

美羽・ベルモット「あなた、次に出るかどうかも分からないわよ。」

キッド「そ、そんなぁ～・・・」

ウォッカ「姉貴！くれぐれも死なないようにお気を付けを！」

美羽「分かってるわ。主人公が死んで、話がまとまるもんですか。」

キャンティ「がんばってよ、美羽！」

美羽「分かってるわ。さて、次回の、人生、何が起こるか分からない｝は、『ＦＩＬＥ４　人身売買の商品に？！美羽の危機！』です！ああ、あたし、売り飛ばされちゃうのかしら・・・」

ＦＩＬＥ４　人身売買の商品に？！美羽の危機！（前書き）

空川美羽（そらかわみう）

ジンが女になってしまい、仕方なく名乗っている偽名。ＦＢＩにばれないように隠している。近頃、完全に心も女になっているらしく、ファッションに興味がある。苦手なもの：虫・ゴキブリ。好きなもの：鳥・服。

ＦＩＬＥ４　人身売買の商品に？！美羽の危機！

「美羽ー！買い物頼めるかしらー？」

ベルモットの声が、アジト中に響く。

今は夜。

皆がボンヤリしているころだ。

「いいわよ、ちょうど暇だったものー！キャンティー！コルンー！ウォッカー！買ってきてほしいもの、あるかしらー？」

「美羽ー！あたいは裁縫道具ー！ちょっと破れててさー！」

「あっしはハンガー！奥からたんまりと出てきたんで！兄貴も時の服も合わせて！えーっと・・・２５個で！」

「俺・・・特になし・・・」

皆が、声を張り上げる理由は、単純。

皆が部屋にいるからだ。

コルンの声は、聞き取りずらいが、ちゃんとコルンが部屋から出て、言ってくれてるため、少しは聞こえる。

「美羽ー！あたし、料理の材料！今日はカレーよ！」

「はいはい！どうせ、全部、あたしの自腹でしょ！」

「御名答ー！」

「まったく。」

美羽は、呆れた声を出すと、部屋から出て、アジトから出ていった。

「よしっ！これで買い忘れはないわね。」

美羽は、スーパーを出て、暗い道を歩いていた。

「にしても、暗いわねえ。襲われそう。」

美羽は言う。

しかし、その言葉が本当になってしまうことを、美羽はまだ知らない。

急に、美羽の後ろから気配がした。

「！！だ、だれ・・・？！ムグッ！」

美羽は、後ろに振り向こうとしたが、ハンカチで口を押さえられた。

「んー！んー！」

美羽は必死にもがく。

しかし、ハンカチにクロロホルムがしみ込んでいたのだろうか？

だんだんと、美羽の目がとろんとしてきた。

「ん・・・」

そして、美羽は完全に意識を手放した・・・

ベルモットたちは、美羽が帰ってくるのが遅いので、心配していた。

「美羽、どうしたのかしら・・・まさか、誘拐されたりしてないわよね・・・？」

「だ、大丈夫だって！美羽だって、元はジンだよ？誘拐しようとしてる男なんて、一瞬で倒すさ！」

キャンティは、ベルモットを励ますが、皆、思いは一緒だった。

もし・・・誘拐されて、監禁されていたら・・・

美羽が、何度もがこうと、監禁されていては、身動きができない。

それは、皆が一番、良く知っていることだった。

「流石に、もう遅いですぜ！俺達もワルだけど、警察に捜索届を出したほうが・・・」

「そうね。あたしが、本名を出すわ。あなたたちも、それだったら疑われないし。行きましょ。」

ベルモットは、泣きそうな顔をなんとか戻し、アジトの出口に向かって、歩き出した・・・

「ん・・・・こ、ここは・・・・？」

美羽は、目を覚ました。

あたりは真っ暗で、何も見えない。

手は、頑丈に縛られていて、女の身である美羽は、ほどけない。

「くっ。あたしとしたことが、誘拐されるだなんて・・・これじゃ組織の笑い者だわ。なんとかしないと。」

美羽が、悪戦苦闘しているその時。

バタンッ！と、扉が開いた。

そこには、一人の男が立っていた。

「よう。お目覚めか？お嬢さん。」

男は、挑発的な言い方で、美羽に話しかける。

「ええ、お目覚めよ！早くこの縄をほどきなさいよ！」

美羽の反発に、男はフンッと鼻で笑った。

「俺を誰か、知ってるか？」

「知らないわよ！あなたたちなんか！」

「フンッ。俺は、W（ダブリュー）。」

「W・・・？アルファベット・・・暗号名（コードネーム）ね！」

「その通り。俺の仲間は、全員、アルファベットであらわされている。AからZまでな。仲間は少ないが、優秀なやつらばかりだ。」

Wは、美羽を見下ろした。

「お前は、一生仲間のところには戻れないぜ。」

「な、何ですって?!」

さすがの美羽も、これには驚く。

「な、何でよ・・・?」

美羽は、少しドキドキしながら、Wに聞く。

「フフッ。お前は、イタリアで、人身売買、に出されるからさ・・・」

「じ、人身売買?!」

人身売買・・・人格を無視して、人間を商品同様に売り買いすること。

それに出されたら、売られた者は一生、買った者に従わなければならない。

たとえ、過酷で苦しいとしても、売られた身の者は、逃げることができない。

つまり、売られた身の者は、‘奴隷’ということだ。

その奴隷に、美羽はなってしまうことになる。

「そ、そんな・・・」

美羽は、完全にいつもの気迫を出せなくなってしまった。

「いや・・・いやよ・・・ベルモットたちと居たい・・・何で・・・あたし・・・なのよぉ・・・」

美羽は、泣いてしまった。

Wは、それを笑いながら見ていた。

「じゃあな。せいぜい、いい夢でも見とけよ。」

Wはそう言うと、部屋から出ていってしまった。

「（何で・・・こんな目に会うのは・・・あたしだけなの・・・？あたし、男に戻るためなら何でもやるけど・・・これは、戻るための試練なの・・・？ねえ、知っているなら・・・誰か・・・教えて・・・！）」

美羽は、ただ、皆が助けてきてくれるのを待つだけだった・・・

「クリス・ヴィンヤードさんですか！」

高木の声が、警視庁に響く。

「はい。それで、捜索願を出したいのです。」

ベルモットは、冷静な口調で話す。

「戸籍は、私どもの都合により、今手持ちにあります。そのご無礼をお許しください。」

「え？あっ、いや、都合があるなら私どもも・・・」

「ありがとうございます。それでは、本題に入ります。」

ベルモットは、顔を引き締めた。

「空川美羽、という女性を探してほしいのです。」

「美羽お姉ちゃんのこと？！」

「こら、コナン君！」

「だって！あのお姉ちゃんが・・・！」

声を上げたのは、コナンだったようだ。

「人違いかもしれねえだろ？！」

「空川美羽って言ってたもん！キッドの予告状の時、会ったよ！」

「んなわけ・・・」

「あの、失礼かもしれませんが・・・」

ベルモットが口をはさむ。

「美羽は、確かにキッドの予告状の時、その場所におりました。私どもが証人です。」

「は、はあ・・・」

小五郎は、頭を下げる。

「ハァイ！」

警視庁に女の声が響く。

「あっ・・・あー！」

「ジョディ・スタ・・・ムグッ！」

「お願いだから言わないでって言ってるでしょ？！」

「んー！んー！」

『分かったから、早く手をどけて！死ぬわ！』と言っている。

「あんた・・・ベル・・・じゃなくてクリスを殺す気かい？」

「あっ。アイムソーリー・・・忘れてまーしたー。」

「こ、この女・・・！」

ベルモット、我を忘れている。

「クリス！落ち着いて、落ち着いて！」

キャンティ達、必死に落ち着かせようとしている。

「とりあえず、誘拐されているとしたら、身代金だろう。逆探知を用意しておけ。」

「はっ！」

高木が逆探知気を持ってきて、用意をした。

準備万端になったその時。

ジリリリリ・・・

電話が鳴った。

「はい、こちら警察ですが・・・」

目暮が電話に出る。

声が、スピーカーに流される。

『警察だな？よく聞け。空川美羽は、俺達が預かった。返してほしくば、３億円用意して、港にある１３番倉庫まで来い。さもなくば、こいつの命はない。』

「待って！美羽の声を聞かせて！」

『いいだろう。ほらっ。最後の電話だぜ。』

「美羽・・・美羽？」

『あっ・・・』

美羽の声が、スピーカーから流れる。

「私よ、クリスよ。‘今、クリスって名乗ってるから。’」

ベルモットが、小さな声で美羽に伝える。

『クリス・・・ごめんね、あたし・・・』

「いいのよ、あなたが無事なら。」

『・・・クリス、あのね・・・あたしね、お金を渡そうが、渡さまいが、どっちにしろ、皆には会えないの。』

『！！』

皆が驚きの顔を見せる。

「ど、どう言うことだい、美羽！」

『あたし、人身売買の商品として、売り飛ばされちゃうんですって・・・』

「！！！」

『イタリアでだって・・・最後に、もっといっぱい話したかったな・・・でも、もう時間なの。ごめんね・・・』

「美羽！」

「姉貴！！」

『もし・・・売り飛ばされずに・・・売り飛ばされなかったらだよ？・・・その時はまた、宜しくね、クリス・・・』

「み、美羽！！」

ガチャンッ。プー、プー、プー、プー。

電話が切れてしまった。

「そ、そんな・・・嘘でしょう・・・？」

「美羽と、一生お別れなんて・・・」

「あ、姉貴・・・！」

「そんな・・・そんな・・・！いや、いやよ、そんなの！！」

ワアァァァァァァ！

ベルモットの悲鳴にも近い声が、警視庁に響き渡る。

ベルモットは、泣き崩れてしまった。

「クリス・・・」

ジョディの声が、むなしくも響く・・・

「3億円を用意して、美羽君を助けるぞ！皆、行くぞ！！」

『はっ！』

刑事たちの声が、一斉に轟(とどろ)く。

「美羽・・・」

ベルモットは、静かに夜空を見た。

夜空は、とてもきれいだった・・・

ベルモットの心とは、正反対で・・・

「あたし・・・もう終わりね・・・男に戻れずに、死ぬなんて・・・
あたし、死ぬ時ぐらい、男に戻っていたかったな・・・」

バタンッ！

扉が開いた。

「時間だ、行くぞ。」

「あなたは・・・？最後ぐらい、教えて？」

美羽の目には、生気が見られなかった。

いつもの美羽なら、目が生き生きと輝いていたのに。

今は、そのかけらも見当たらなかった。

「俺は・・・Ｊ（ジェー）。お前は？」

「空川美羽・・・」

「美羽、か。いい名前だな。美羽って呼んでいいか？」

「ええ、いいわ。最後ぐらい、友達感覚でいたいもの・・・」

「ありがとよ。」

「それにしても、いい暗号名（コードネーム）ね、Ｊって。あたしは、ジンって言う暗号名（コードネーム）よ。・・・あと・・・これは秘密にしてね・・・？」

「ああ、約束するよ。」

「あたし、本当は男なの。」

「？！」

Ｊは驚きの顔を美羽に向ける。

当たり前だ。

見た感じ女の美羽が、本当は男だというのだから。

「信じられないと思うけど・・・本当なの。」

「・・・俺は、信じるぜ。嘘つくとは思えねえ。嘘ついても、得する事なんて、何にもねえからな。」

「・・・ありがとう。あなたが初めてよ。正体をばらせたの。ありがとうね。」

美羽は、笑って見せた。

しかし、いつもの満面の笑みではなかった。

すごく、哀しそうだった・・・

Ｊは、見ていられなくなってきたのだろうか？

急に、美羽に詰め寄った。

「な、何？！」

「・・・お前を逃がしてやるよ。」

「？！あ、あなた何言って・・・」

驚かずにはいられない言動だった。

自分の、人身売買に出そうとしている男の一味が、逃がすというのだから。

普通、何をしてでも返したくないはず。

なのに、なぜ・・・？

「お前、このままじゃ壊れちまう。精神も、心も・・・その前に逃げねえと、やばいからな・・・」

「・・・でも、どうして？普通、それを望むはずよ？」

「お、俺さ・・・親がこの組織の人間だからっていう理由で、仲間にされちまったんだよな。俺、探偵にあこがれてて・・・なのに、人殺したり、人を売れって言う命令を出されて・・・逆らえなくってさ・・・もう、探偵なんかになれないって思うと悲しくて・・・つい、強がっちまうんだよな。でも、お前と話してると、癒される。こんなやつを、売るほうが絶対におかしい。そう思うから・・・」

「・・・」

美羽は、心を動かされた。

親が入っていただけで、子供には関係ないのに・・・

それを無理やり入れるなんて。

強制的だなんて、かわいそうだった。

「大丈夫よ！絶対に！もし仲間が捕まったら、あたしがあなたをかばってあげる！無理やりなんだって！だからお願い！力を貸して？」

「・・・ああ！俺はお前の味方をする！さぁ、行こう！」

「ええ！！」

そして、美羽とＪは、隠し扉で部屋を出て、外に行くことにした・・・

「ここが、指定の場所だな・・・」

目暮達は、指定場所に着いた。

「よう。持ってきたな。」

男が出てきた。

その男とは・・・Wだった。

「そこにおけ。抵抗したら、あいつの命はない。」

どこから出したのか、Wの手には銃が握られていた。

目暮は、そっとカバンを置く。

「よし。」

Wの声が響く。

そして、Wがカバンをとり、目暮達に背を向けた瞬間だった。

一つの影がWのところを走っていった。

そして、見事な背負い投げが繰り出された。

「か、確保〜〜〜〜〜〜〜!!!」

Wを投げたのは、小五郎だった。

強く背中を打ちつけたWの元に、警官が雪崩のように走っていった。

「美羽お姉ちゃんをどこにやったの?!」

コナンが叫ぶ。

「フンッ。あの女は今頃、船でイタリアに行くだろうよ。」

「な、何ですって?!」

「おい・・・!姉貴を売ったらだたじゃすませねえぞ!!!」

ウォッカの怒り、MAXだ。

「そんなもの、売りに行くやつにいいな。まぁ、もう間に合わねえだろうがな。ハーッハハハハハハ!!」

Wの笑いが、倉庫中に響き渡る。

「急ごう！イタリア行の船だって、決まってる！あたいはすべて覚えてるから、港までいけるよ！」

「任せたわよ、キャンティ！」

「間違えたら、ただじゃ済まさねえぞ！」

「ああ、任しときな！」

「皆さんは待っていてください！必ず連れ戻します！！」

ベルモットはそう叫ぶと、キャンティ達を追って、走っていった。

「がんばってくれよ・・・」

「こっちだ！急げ！」

美羽とＪは、狭く、暗い通路を走っていた。

ここは、美羽の部屋の隠し扉からつながっていた道で、このままま
っすぐ行けば、外に出られるのだという。

「ひ、光だわ！」

「もうすぐだ、頑張れ！」

「え、ええ！あっ！」

グラッ。

美羽の体が傾いた。

「美羽！！」

すぐさまＪが駆け付ける。

「ごめっ・・・こけちゃって・・・さっ、行きましょ！」

美羽は、さっと立ちあがると走り出した。

そして、外に出た。

「あっ・・・」

「あっ・・・」

「べ、ベルモット！キャンティ！コルン！」

「美羽！」

「姉貴！！」

「よかった・・・よかったぁ！！」

ベルモットは、美羽に抱きついた。

「ベルモット・・・」

「もう・・・心配したんだからね！」

「ごめん、ベルモット・・・」

美羽は、泣いた。

「美羽・・・よかったな。」

「J！ええ、ありがとう、助けてくれて。」

『ええー？！』

ベルモットたちは、驚きの声を上げる。

当たり前だ。敵であるはずの人に、礼を言うのだから。

「この人、あたしを助けてくれたの。それに、強制的に仲間に入れられたみたいだし。事情聴取だけで済むと思うわ。それに、いざとなればあたしがかばうしね。」

「そう・・・ありがとうございます。」

「い、いや。いいです、別に。ただ、かわいそうだったものですから・・・」

Wは、照れくさそうに下を向く。

「警察は？」

「もう仲間を取り押さえたわ。」

「じゃ、じゃあ俺も行かないと・・・」

「いいのよ。あなたは。特別扱いってことで！ねっ？」

「え・・・あ、ありがとうございます！」

Jは、涙を浮かべながら喜んだ。

「じゃ、じゃあそろそろ。ありがとう、美羽！」

「がんばってね！」

Ｊは、夜の闇に消えていった・・・

「もうこんなのごめんだからね、美羽。」

「ええ、ごめんなさい。油断してたの。今度から、気を付けるわ。」

そして、美羽とベルモットたちは、仲良く帰っていった。

その姿は、まるで家族のようだった・・・

ＦＩＬＥ４　人身売買の商品に？！美羽の危機！（後書き）

美羽「はぁ、よかったわぁ～。売り飛ばされなくって。やさしい人もいてよかった～。」

ベルモット「たいがいはあんな人、いないわよ。運がよかったのね。」

キャンティ「もうこりごりだよ、こんな目に会うのは。」

コルン「・・・災難が降りかかり続ける、これ、この小説の、特徴・・・何が起きるか、分からないのが、話・・・次、驚きのこと、起こるらしい・・・」

美羽「どんな驚きがあるのかしら。さて、次回の‘人生、何が起こるか分からない’は、『ＦＩＬＥ５　美羽、正体がばれる！』よ！あら、敬語にしなくちゃ・・・ああ、もうめんどくさい！今度からは、いつもどおりよ！でも、誰に正体がばれるのかしら。まさか、ＦＢＩだなんてことは・・・ありえるかも・・・ああ、どうかＦＢＩではありませんように・・・」

ＦＩＬＥ５　美羽、正体がばれる！

「ああ～！いい天気～！」

美羽の声が、響き渡る。

今日は晴れ。太陽がさんさんと降り注ぐ。

周りの人間たちは、じいっと美羽を見つけている。

「美羽、静かにして。恥ずかしいわ。」

顔を赤くして、注意を促(うなが)すのは、ベルモット。

「あ、姉貴っ。ブ、ブラブラ散歩って、だいぶ、長く、ない、ですか・・・？」

息切れ切れで、美羽に訴えるのは、ウォッカ。

「あんた、だらしないねぇ。もっと体力つけなきゃ。」

「お前、挙句の果て、体力、つけるまで、絶食に、なる・・・」

「え、そ、そんなぁ〜！！」

コルンとキャンティの鋭い言葉に、ウォッカ、沈没。

「で、でも、姉貴は何で、疲れないんですかい？」

「当たり前じゃない。だってあたし、元はジンだもの。」

「そうでやした。」

ウォッカは、頭をかく。

「ちょっと人が多すぎて暑いわ。裏の道に行きましょ。」

「そうね。」

美羽達は、裏の道へと行った。

「ねえ。美羽。男に戻る方法、見つかった？」

ベルモットが、美羽に聞く。

「・・・ううん、まだ。あ～あ。早くジンに戻りたいなぁ。・・・！！」

美羽は、何かを察知した。

しかし、顔には出さず、ポーカーフェイスを保っている。

「あっ、やっぱり女のままでいいわ。話が合うし。」

「・・・あなた、あたしの身、案じてる？」

「いいえ、これっぽっちも。」

「・・・死のうかしら。」

「え?!な、なしなし!今の無し〜!!」

「フフッ。騙されやすいわ。」

「も、もう!!」

美羽たちは、長い間笑いながら歩いていた。

その日。美羽達はジョディに呼び出された。

指定された場所は、杯戸中央病院。

そこでは、赤井、ジョディ、ジェイムズがいた。

「何？」

ベルモットが冷たく言い放つ。

「・・・単刀直入に言うわ。あなた、空川美羽さんよね？空川さん、あなた、ジンでしょう？」

『！！！』

「な、何言ってるの？証拠は？それに、ジンって男でしょう？あたしは女。性転換だなんて、ありえないわ！」

美羽は、声を張り上げる。

「シュウは偶然聞いてたのよ。『早くジンに戻りたい。』ってあなたが言っていたこと。これは証拠じゃない？」

「・・・！」

「あなた、騙されやすいタイプなのね。」

口を開いたのは、ベルモットだった。

「な、何ですって？！」

「・・・仲間だったら、何でも信じるの？！誰でも信じるの？！」

「・・・」

「いつでも信じてたら、あなた、いつか赤井秀一に利用されるわね。この男、誰かを利用してでも、あたしたちの情報を得ようとするもの。」

「・・・！」

「それにね！それ以外の証言だなんて、どこにも・・・」

「もうやめて、ベルモット！！」

「！！み、美羽・・・？」

「もうやめて・・・もう沢山よ・・・あたしのせいでこんなになるなんて・・・」

「み、美羽・・・」

美羽は、力が抜けたようだ。

ペタンと地面に座った。顔を蔽(おお)い隠して。

「どうして？どうしてケンカするの？あたしのことでケンカされたくなんかない。あたしの言ったこと、赤井さんが聞いてたこと、あたし、知ってたのよ。だから、さっき言った事は取り消したかった。

それに・・・あたしのせいでケンカされたら・・・あたし、どうしたらいいの？どこにいればいいの？ケンカを止めたらいいの？黙ってみてたらいいの？どっちなの？！」

「・・・」

「そうよ、あたしがジンよ。朝、目が覚めたら女になってたわ。だから、すごく恥ずかしかった。普通の男として、生きられないんだもの。皆、男なのに、あたしだけ、女になっちゃったんだって・・・だからなのかしら？男がすごくうらやましかった。普通の男として生きられる、皆がね。・・・それに、隠し通せないって分かってた。何せ、赤井秀一がいるんだもの。だから、言うなら自分の口で言いたかったの。」

「美羽・・・」

「隠してて・・・ごめんなさい。」

美羽は、顔を隠したまま。謝った。

どうしても、泣いているであろう顔を、見せたくなかったのだろう。

「美羽・・・ごめん、ごめんね・・・」

「・・・ううん、いいよ。ちゃんと話せたもの。」

美羽は、顔をあげて、笑って見せた。

「えっと、その、すみません・・・」

「姉貴、さっき謝りましたぜ？」

「え、そうだった？」

「あんた、記憶力なくなったんじゃないかい？」

「なっ！あらそう。あの方に伝えましょうか。あ～んなことや、こ～んなこと。」

「な、何だい？それ！」

「あら、何だったかしら？」

「（ガクッ！）あのね！」

「アハハッ！騙しやすいわ！きっと一番騙しやすいのは、ウォッカね！」

「あ、あっしですかい？！」

「ええ、ジンのときでも騙されてたじゃないの！」

「あ・・・記憶力いいっすね・・・」

「でしょう？」

「くっ・・・あなたたち、漫才はやめなさいよ・・・」

『漫才なんかやってない！』

美羽と、キャンティ達の声が重なる。

「他から見れば、漫才よ・・・くっ・・・」

「もう！」

ベルモットは、必死に笑いをこらえている。

「明るくなったな、組織・・・」

「ええ、ジン・・・いえ、美羽さんのおかげで、殺人はなさそうね、今のところ。」

「そうだな。見守るか・・・」

ジョディたちは、美羽たちを、温かく見ていた・・・

ＦＩＬＥ５　美羽、正体がばれる！（後書き）

美羽「予感が、的中してしまったわ・・・」

コルン「でも、隠さずに済む、それ、いい。」

キャンティ「そうだよ！赤井も笑わなかったし！これで一安心！」

赤井「お前たち、俺のどんなことを想像してたんだ？」

ベルモット「えっと、笑ってるところ？」

赤井「・・・想像つかん。」

ジョディ「自分で言っちゃだめよ、シュウ。」

ジェイムズ「希望持て、赤井君。」

赤井「はあ・・・」

美羽「でも、ホントによかったわ。」

ウォッカ「姉貴！そろそろ、次回予告を・・・」

美羽「そうね。さて、次回の，人生、何が起こるか分からない，は、『ＦＩＬＥ６　カラオケで大騒ぎ！』よ！カラオケかぁ。久しぶりだわ。でも、何か起こりそうな予感・・・」

FILE6　カラオケで大騒ぎ！

「ああ～いい天気！この頃、いい天気が続くわねぇ～！！」

「あなた、本当にやめて・・・って言うか、恥ずかしくないの？！」

美羽は、町中で大声で言う。

ベルモットは、赤を赤らめ指摘。

「本当に明るくなったわねぇ～。」

というのは、ジョディ。

他にも、赤井、ジェイムズがいる。

「だって～、女なんだも～ん。」

「子供みたいな言い方やめろ。」

「この姿じゃ、まだ高校生だも～ん。」

などと言っているときに、ベルモットが、あっ！、と声を上げた。

「ああ～！あなた、高校行ってないじゃない！！」

「あら！やっぱ～、どうしよ～！」

混乱しながら、喋る美羽。

「まっいっか。明日いこ～っと！」

「切り替え早っ！」

すかさずツッコミ。

「ねえ！カラオケ行かない？久しぶりにさ！」

美羽が提案する。

「それはいいわね！行きましょう！」

ベルモットも賛成らしい。

「俺はパス・・・・」

『行くわよね？！』

「はい・・・・」

赤井は、断ろうと思ったのだが、美羽とベルモットの気迫で、あっさり賛成。

他の皆も、全員賛成した。（美羽とベルモットが、半ば強制的にしたのだが。）

「近くだと・・・・あら、ここにあるわ！」

目の前には、少し古そうなカラオケボックスがあった。

しかし、結構人気があるらしく、たくさんの人がいた。

「ここにしましょ！ほら、行くわよ！！」

『は～い。』

皆の声が響き、美羽達はカラオケボックスに入っていった。

「さぁ、歌いましょ！」

美羽の声がボックスに響く。

「まずは、美羽から手本を見せてよ！」

「ええ?!」

ベルモットのいきなりの提案に、美羽は戸惑う。

「いいじゃない!ねっ?聞いたことないし!」

「・・・」

考え込む美羽を、じっと見る、ベルモット達。

「・・・分かったわ。じゃあ、‘氷の上に立つように’にしようかしら。」

「ホント?歌ってくれるのね?やった!はじめて聴くわ〜、美羽の歌声!」

そして、ベルモットが、ピッピッピッと設定する。

そして、音楽が流れ始めた。

その声は、とてもきれいな声だった。

氷の～上～に立つ～ように～♪あぶな～げな～こ～ともし～た～い♪

思い～えが～いてた～夢も～♪形～にして～みたい～♪

ＦＯＲＥＶＥＲＭＹＤＥＳＴＩＮＹ～♪

う～ちゅうせ～んが目の前に～お～りたら～♪

ま～よ～わず手を～伸ばしその～ふ～ねに乗り込みた～い♪

そ～の～日一日をくや～み～た～くないからきっと～♪

と～もだ～ちだって～♪残し～地球～を旅立つ～の～♪

何～も～ない毎日～が～♪一番だと言う～けれど～♪

ほんと～は～に～げて～る♪君の～いない～夜に～ま～けて～♪

氷の～上～に立つ～ように～♪あぶな～げ～なこ～ともし～た～い♪

思い～えが～いてた～夢も～♪形～にして～みたい～♪

ＦＯＲＥＶＥＲＭＹＤＥＳＴＩＮＹ～♪

わ～ずかすうぎょう～でかた～づ～け～られた～♪

し～ん～ぶん～きじ～にも～一喜～い～ち～ゆうしてみる～けど～♪

と～ちゅ～う～で～放りなげな～いようにわたしらし～く行こう～♪

の～ぞみ～つづけた～場所で～生きてい～るんだから～♪

まえ～が～み～を～すこ～し～♪みじか～くした～だけで～♪

うま～れ～か～わ～れ～ちゃ～う～♪そんな～考え方が～す～きよ～♪

素～顔の～まま～でいた～いから～♪内緒～よ～恋～をした～って～♪

光～より～もはや～く遠く♪心～は～飛んで～ゆく～♪

ＦＯＲＥＶＥＲＭＹＤＥＳＴＩＮＹ～♪

氷の～上～に～立つ～よう～に～♪あぶな～げ～な～こ～ともし～た～い～♪

思い～えが～い～てた～夢も～♪形～に～して～みたい～♪

ＦＯＲＥＶＥＲＭＹＤＥＳＴＩＮＹ～♪

「う、うま～い！！どうしてそんなにうまいの～？！あなた、歌手にもなれるわよ！！」

ベルモットが褒めちぎる。

「そ、そうかしら・・・？普通に歌ったつもりなんだけどね・・・」

その時だ。

バタンッ！

急にドアが開いた。

「素晴らしいです！」

「はっ？！」

美羽が、変な声を出す。

「私は、歌手のスカウトをしています。是非とも来ていただきたく存じます。ささ、行きましょう。」

「キャッ！な、何すんのよ?！」

美羽を連れて行こうとする謎の男に、ウォッカはキレる。

「姉貴に何しやがる！！」

ドッカラガッシャーン！！

ものすごい破壊音が・・・（汗）

しかし、ウォッカの攻撃は終わらなかった。

派手に破損していく廊下に、従業員呆然。

美羽達も止まってしまっている。

「う、ウォッカ・・・もう大丈夫よ。じゃないと、死んじゃうわ・・・」

美羽が、もうやばいとウォッカを止める。

しかし、全然止まらない。

「できれば来てくださ・・・」

「まだ言うか！！」

流石に、ベルモット達も、その辛抱強さに疲れてきたようだ。

さっさと終わらせようと、銃を取り出そうとする。

「やめて！」

そう言ったあと、小さな声で言う。

『警察呼ばれるわよ？銃刀法違反なんだから！！』

「じゃあ、素手で行くわ。」

「はあ？！」

ベルモットが言った、驚きの言葉に、美羽は固まってしまった。

『はぁ！！』

気合いの声を出し、次々と雪崩(なだ)れ込(こ)む、ベルモット達。

赤井、ジェイムズ、ジョディは、固まってしまった。

「・・・止めるに止められないわ・・・」

「止めたら・・・巻き込まれること確定だな・・・」

「そのようだね・・・」

ただ、呆然と見つめる、赤井たち。

とうとう堪忍袋の緒が切れた美羽は、大声を張り上げた。

「やめなさい！！あなたたち、それ以上したら、警察に連れていくわよ！！」

元は‘ジン’で、犯罪者だった美羽から、そんな言葉が出てくるとは・・・

少し驚いたものだ。

『は～い・・・』

皆は、しぶしぶ了承する。

「全く。とりあえず、これ以上あたしに何か言ったら、死ぬと思ってくださいね♪」

「は、はい・・・」

男は、あっさり逃げていった。

「じゃあ、払うのは、あそこの人たちよ。じゃあね。」

『み、美羽！？』

美羽は、さっさと帰ってしまった。

そこには、白い目を向けられた、ベルモット達が残っていた・・・

その翌日。

ベルモット達は、莫大なお金を払わされたという・・・

ＦＩＬＥ６　カラオケで大騒ぎ！（後書き）

美羽「大騒ぎしすぎね、あなたたち。ＦＢＩは払わされなかったようじゃない。」

ジョディ「当たり前よ！関係ないんだもの！」

赤井「それで払えと言われたら、殺し・・・」

美羽「それ以上言わないで。」

赤井「あ、あぁ・・・」

ウォッカ「すいやせん、姉貴・・・」

美羽「いいのよ、ウォッカ。あなたはあたしを守ってくれたもの。」

ベルモット「私だけ殴られた～！」

美羽「加勢したあなたが悪いのよ！」

キャンティ「あたい達は、入るに入れなかったしね♪」

美羽「フフッ、そうね・・・さて、次回の‘人生、何が起こるか分からない’は、『ＦＩＬＥ７　第２の犠牲者！』よ。もしかしたら、あたしみたいに女になる人もでるかもっ♪できれば、赤井秀一がいいわっ♪」

赤井「断固却下。」

美羽「作者に言っておくことね。じゃあね～！」

赤井「お、おい！俺に言わせる時間をくれ！」

美羽・ベルモット『却下よ。』

赤井「もし女になったら、終わったな、俺・・・」

FILE7　第2の犠牲者！

美羽は、帝丹高校の前にいた。

「ここね・・・さて、行きましょう！」

美羽は、中へと入っていった。

美羽は、教室の前に着いた。

深呼吸を1回して、コンコンとノックする。

そして、ガラリと戸をあけ、中に入った。

皆、少し驚いているようだ。

「すみません、この前は・・・少し用事があったもので・・・急に来てごめんなさい。」

先生は、慌てて弁解する。

「い、いいさ、そんなの！とりあえず、紹介しよう。この子は、空川美羽君だ。仲良くしてやってくれ！」

『はーい。』

皆は返事をした。

「とりあえず、毛利の後ろだ。毛利！手を挙げてくれ！」

「ここよ。」

美羽は、スタスタと歩いていく。

「初めまして、空川美羽です。これから宜しくお願いします。」

敬語であいさつする美羽。

「いいわよ、敬語じゃなくて。私は毛利蘭。宜しくね。」

にこっと笑う蘭を、美羽はしばらくの間、ジッと見ていた。

「それじゃあ、授業を始めるぞ～！！」

先生の声で我に返った美羽は、ノートと教科書を取り出し、授業に集中した・・・

「ただいまー。」

美羽が、帰ってきた。

すると、ジョディが走ってきた。

「美羽！大変なの！シュウが・・・シュウが！」

「ちょ、ちょっと待って、全然わからない・・・とりあえず、落ち着いて？」

美羽は、ジョディを落ち着かせる。

だいぶ落ち着いたところで、ジョディが話し始めた。

「あのね、実は・・・シュウが、‘女の子’になっちゃったの・・・」

「はぁ？！あの赤井秀一が？！」

「とりあえず、来て・・・」

ジョディの様子からすると、どうやら本当らしい。

とりあえず、部屋に入ることにした。

そこには・・・

「あ、赤井秀一・・・なの・・・？」

赤井秀一らしき人がいた。

ジョディは、説明を始めた。

「あなたが学校に行くまでは、シュウは男の子だったでしょ？でもね、仮眠をとって、起きると、女の子になってたの。で、この状態。」

簡単な説明だったが、何となく分かった。

美羽は、赤井の顔をまじまじと見る。

そして、最初の言葉が、これ。

「かわい～！！」

『・・・は？』

ジョディ達は、その言葉を理解するのに、数分かかった。

やっと頭の整理を終え、美羽を見ると、美羽の目は、キラキラと輝いていた。

赤井が、心配になって言う。

「まさか・・・女物の服を着せるなんて、言わない・・・よね？」

「その通りよっ♪」

あっさり言ってしまう美羽に、赤井は固まってしまった。

そして、どこから出したのか、美羽は女物の服を持っていた。

さすがの赤井も、これには顔を引き攣らせた。

「ちょっとの間よ♪」

「いやぁぁぁぁぁぁ！！」

誰も、この二人を止めることはできなかった。

止めようとしても、巻き込まれることが確定しているからだ。

「誰か助けて～！！」

赤井の声が、虚(むな)しく部屋に響いた。

それから、1時間はしただろうか？

決着は、やはり美羽の勝利で終わったようだ。

「可愛いじゃない！」

美羽は大絶賛。

「可愛くない！」

全面否定する赤井を、美羽は無視した。

「とりあえず、名前よね。」

「人の話を！！」

赤井を、必死にジェイムズがなだめる。

「・・・うん、これがいいかな。」

どうやら、勝手に考えたらしい。

「苗字はそのままね。で、名前が、秀香（しゅうか）。赤井秀香（あかいしゅうか）。どう？」

『いける！』

赤井と美羽以外は、全員賛成した。

赤井は、もう諦めたらしい。

「じゃあこれからよろしくね、秀香ちゃん？」

「・・・」

はぁ、と大きなため息をつく秀香。

二人も女になってしまい、心底怯えてしまう、男子集団なのであった・・・

ＦＩＬＥ７　第２の犠牲者！（後書き）

美羽「やった！予想が当たったわ！」

赤井「なぜ、俺なんだ・・・ジェイムズでもよかったはずだろ？」

美羽「詳しい事は作者にね。」

ｍａｒｔｉｎｉ「赤井のほうがおもしろそうだったし。」

美羽「らしいわよ、秀香ちゃん。」

秀香「・・・どうして美羽の仲間入りに・・・はぁ、嫌だわ・・・」

キャンティ「とりあえず、服も買いに行かなきゃね。」

秀香「いらない。」

女子全員「いるの！」

秀香「はい・・・」

美羽「分かればよろしい。さて、次回の、人生、何が起こるか分からない，は、『ＦＩＬＥ８　美羽と秀香、芸能界へ？！』よ！あら、アイドルにでもなれるのかしら？それとも女優？」

秀香「私まで巻き込まないで頂戴・・・」

美羽「巻き込むわ。（きっぱり）」

秀香「いつもより不幸よ、私・・・」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0532f/

人生、何が起こるか分からない

2010年10月16日03時33分発行